

[様式 1 1]

(対象事業：展覧会における学習プログラムの共同開発と実践)

事業名：展覧会における学習プログラムの
共同開発と実践

事業者名：神戸市立博物館

連携事業館名：神戸市内小中学校

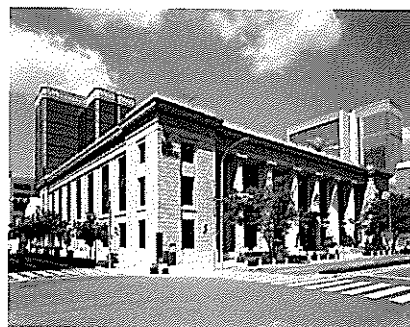
住所：神戸市中央区京町 24 番地

TEL：(078)391-0035

FAX：(078)392-7054

HPアドレス：

<http://www.city.kobe.jp/cityoffice/57/museum/>



①施設概要

神戸市立博物館は、昭和 57(1982)年に、以前からあった南蛮美術館と考古館を統合し、神戸の歴史を展示に加えた新しい人文系の博物館として設立。基本テーマは、「国際文化交流—東西文化の接触と変容」。約 39,000 件の収蔵品があり、国宝・桜が丘銅鐸をはじめとする考古資料、多数の重要文化財を含む南蛮・紅毛美術、全国有数の質・量を誇る古地図類が核となっている。常設展、企画展、特別展も基本テーマに沿って開催している。収集・展示に加えて、様々な普及事業を展開。特に学校との連携は活動の一つの柱として、強く推進を図っている。

②事業の意図目的

神戸市立博物館は開館以来「学校との連携」をひとつの柱として活動してきた。とりわけ近年においては、「学社融合」の考えに基づき、より積極的な連携活動を推進している。芸術拠点形成事業においても、収蔵資料の教材化、教材として活用できるガイドブックの作成、展覧会における学習プログラムの開発等、学校との連携を主軸とした事業を推進してきた。今年度については、平成16年度に取り組んだ事業の成果と課題を踏まえ、学校(教員)と連携しながら、展覧会内容にそった学習プログラムの共同開発と実践をすすめたい。様々な分野における展覧会について、児童生徒の興味関心を喚起し、理解を促すことを目的とし、さらには、博物館の施設や文化・芸術に対しての普及啓蒙を図っていきたい。またこれまで培ってきた博物館と学校とのネットワークをさらに強化し、相互情報発信でできる機会を拡大したい。

③事業概要

◆学習プログラム共同開発のためのプロジェクトチームの設置

今年度開催予定の3つの展覧会において、児童生徒の興味関心を喚起するための学習プログラム(ワークシート作成やワークショップの実践)を開発するため、神戸市内小中学校及び高等学校の教員と博物館スタッフで構成されるプロジェクトチームを設置する。構成メンバーについては、展覧会の内容に沿いながら、社会科や美術・図工科等の教科特性を考慮し、それぞれの展覧会ごとに依頼する。

◆展覧会ワークシート等の発行と関連ワークショップの実践

博物館年間スケジュールに組み入れながら、各展覧会ごとに設置するプロジェクトチームを中心に、ワークシートや鑑賞ガイドを編集・発行する。ワークシート等については来館する児童生徒に配布するとともに、学校での事前指導や授業で活用していく。また、展覧会の内容をより理解できるワークショップを企画し、児童生徒の参加を広く募り実践する。展覧会については以下の3つである。①特別展「ベルリンの至宝展」②館蔵の古地図資料、南蛮美術資料、近代版画についての企画展③特別展「ナポレオン展」

④事業の製作物及び報告書等

ベルリンの至宝展「こどものための鑑賞ガイド」(B5 16 ページ)
川西英・川西祐三郎作品選等「こどものための鑑賞ガイド」(B4 三つ折り)
ナポレオンとヴェルサイユ展「こどものための鑑賞ガイド」(B5 16 ページ)

⑤参加者状況

参加者人数 延べ 23,565 人

内 訳	ガイドブック等配布	22,900
	ワークショップ等参加	665

(1) 事業の実施状況について

はじめに

神戸市立博物館では、学校との連携を活動の1つの柱と考え、積極的に進めてきた。館外では、連携授業の実施や教材の貸し出しなどを行い、館内では、各種ワークショップ、ギャラリートツアーやオリエンテーションなどがその好例である。学校にとって身近な博物館となるよう日頃から心がけてきている。平成14年度からは「芸術拠点形成事業」に取り組んできたが、その内容も学校との連携を中心に据え、複製教材の製作や学習プログラムの開発等を行ってきた。平成17年度に実施した事業は、過去の取り組みをふまえ、一層学校との連携が深まるよう、力を注いだ。

1. 学習プログラム共同開発のためのプロジェクトチームの設置

学校教員と博物館職員とでつくるプロジェクトチームの設置は、昨年度に引き続くものである。学習プログラムの開発、すなわち鑑賞ガイドの作成とワークショップの企画、運営が主な活動内容となる。昨年設置した2個のチームとは、構成員を大幅に変更し、昨年の反省を活かすると同時に、新しい発想の導入も目論んだ。美術・図工、社会、小・中学校という幅の広い領域からメンバーを構成することは昨年と同様におこなった。

打合せ協議では、鑑賞ガイドの内容についての協議にそれぞれの専門性からの視点がいかされ、充実した時間となった。ワークショップの検討でも、学校の教室でもできるようにしたいという視点から協議したこともあり、実際に実験するなど夜遅くまで活動した。今年度は、博物館に集まってもらうだけでなく、博物館から勤務校へ出かけて意見を聴いたり、研修会の場にあわせて協議するなどして、協議をすすめた。

チームの解散の際に、参加しての感想などを聞くと、「学校とは違う環境ではあるが学校と同様の目的に向かっていることが楽しかった」「異校種の教員、博物館の職員と深い話し合いができて、良い経験ができた」などが返ってきた。このような感想が、博物館、学校という枠をこえて、子どもたちのためにという共通の目的で連携できた証拠であろう。

2. 展覧会ワークシート等の発行と関連ワークショップの実践

(1) 展覧会ワークシートについて

①作成について

昨年の反省をふまえて、より進化した内容のものを目指した。現場教員の生の声をできるだけ反映させること、使用する子どもの視点に立った内容とすることは踏襲したが、今年度はさらに1冊の中で、幅広い年齢の子ども利用に耐えうるようなものを目指した。昨年のアンケートのなかで「むずかしい」とする低学年の保護者と「簡単すぎる」という高学年の保護者があり、この双方の声に応えたいと考えて内容を精査した。今年度おこなった方法としては、低学年を対象の基本とし、ページを変えて高学年向けの内容を入れることとした。また、保護者がワークシートを接点に作品について子どもと会話するという利用の実態をふまえて、保護者にも役立つ内容をも挿入することも考慮に入れた。

博物館職員、学校教員ともに刺激し合うなかで作成したことで、互いの意識改革が一層進み、連携が深まった。

②配布、活用について

完成したワークシート等は、各展覧会開催中に来館した小中学生全員に配布した。休日の個人利用、平日の団体利用にかかわらず配布した。

ワークシートの活用については、学校での活用と館内での活用を行った。学校での活用では、プロジェクトチームに所属した教員の勤務校を中心として、授業の中での活用をはかった。神戸市立飛松中学校、神戸市立伊川谷中学校などでは、博物館職員が学校に出向く形での連携授業ではないが、担当教員が授業の中でワークシートを使って授業を実施した。授業の中で、ワークシートを博物館に持参して鑑賞する課題を出題した学校もあり、休日の日に熱心にワークシート片手に鑑賞する子どもの姿も見られた。館内では、鑑賞前の博物館オリエンテーションでの活用をはかった。単に配られたものを手に取るだけでなく、鑑賞のポイントをわかりやすく示し、興味を喚起してから展示会場に向かうというスタイルである。小学校 14 校・832 名、中学校 5 校・126 名、高等学校 7 校・235 名を対象に実施した。スクリーンのスライドと手元のワークシートで作品を身近に感じて鑑賞してもらえるように配慮した。



ベルリンの至宝展
ワークシート



川西英・川西祐三郎作品選
ワークシート



ナポレオンとベルサイユ展
ワークシート

(2) ワークショップについて

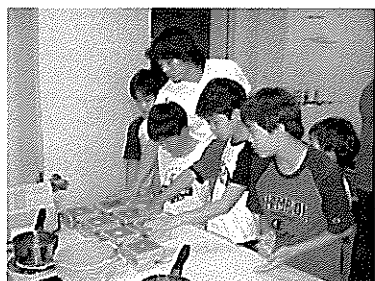
7種類で計 11 回実施した。参加人数は、665 名。付き添いの保護者などはカウントできていないので実際の人数はもう少し多い。応募者も多く、定員を設けたすべてのワークショップで抽選を行った。計画の段階で留意したのは、展示作品にかかわりのある内容、授業でも実施できる内容である。また、安易な方法に頼らず、本格的な取り組みにしたいということも考慮した。

「ベルリンの至宝展」では、「粘土でつくろうエジプトの神様」「金属をとかしてメダルづくり」「古代エジプトからの贈り物ーヒエログリフと神様」「キッズ・ミュージアムデイ」の4種類で6回実施した。いずれも展示作品に深く関わり、自分の作品を持ち帰ることのできる内容とした。「キッズ・ミュージアムデイ」では、本来は休館日である月曜日におこなったもので、ギャラリートーク、作品解説会、作品スケッチ、参加者全員でつくる作品制作などを開館時間内に組み合わせて行い、参加者銘々が好みに合わせてジョイントす

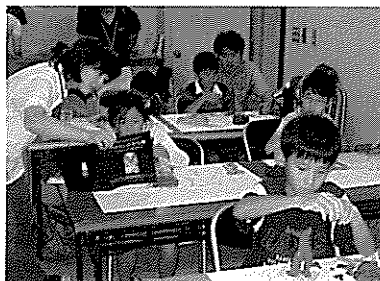
る形をとった。いずれもプロジェクトチームの教員が運営の中心となり、一部学生スタッフが補助した。

「川西英・川西祐三郎作品選」では、「川西祐三郎先生と版画をつくろう」を実施した。第一線で活躍を続けられる川西祐三郎先生をお招きしての講座ということもあり、人気も高かったことはもとより、参加者の意欲が高い、質の高い講座として行うことができた。親子での参加を条件としたことも好評で、今後のワークショップ企画に参考となるものであった。専門家から教えてもらわないとわからないノウハウが示され、学校で授業を行う際に役立つことと思う。

「ナポレオンとヴェルサイユ展」では、「油絵を描こう」「くんしょうを作ろう」を各2回実施した。授業でも実施できるワークショップを意識して企画、運営に心掛けた。それは、マニュアル化することや時間配分などに象徴される。実際、神戸大学附属住吉小学校では、「くんしょうを作ろう」を参考に授業を実施する予定になっている。



金属をとかしてメダルづくり



粘土でつくろうエジプトの神様



キッズミュージアムデイ



キッズミュージアムデイ



油絵を描こう



くんしょうをつくろう

(2) 連携等について

学校教員とのプロジェクトチームを展覧会ごとに設置した。社会科や図工科の研究部に所属する先生方の代表であり、メンバーの決定からワークショップの企画立案まで、それら研究部と連携して協議を進めることができた。教員個人との連携から研究部という組織との連携へ発展させてこられた面もある。このような連携の形も2年目となり、すっかり定着した感がある。ワークショップの企画やワークシートの制作は学校の先生方とともに行うことで当たり前になりつつある。

(3) 成果物について

本事業で制作したワークシートは、すべて学校教員と博物館職員からなるプロジェクトチームの協議の結果から生まれたものである。書き込みのページや作品を探し出すゲーム感覚のページなどさらに工夫を重ねている。今年度特に「ナポレオン展」における取り組みでは、1冊で小学校低学年から高学年まで対応できるようなページ構成に心掛けた。平易さと発展性を併せ持たせることは、難しいことではあるが、概ね好評を得ている。また、親子の話し合いのきっかけとなるような内容にも気を配った。親子で作品の感想を言い合ったりするなどして、作品についての理解が深まるようにも考慮した。

3種類のワークシートは、展覧会が終わってからも問い合わせがあり、残部はほとんど残っていない。

(4) 参加者の反応

ワークショップもワークシートも参加者からは概ね好評を得ている。

ワークシートについては、編集の工夫の効果があったと考えている。親子でワークシートをはさんで熱心に観覧する姿が多く見られたし、ワークシートを持ってわざわざ学芸員に質問をする子どもも複数見られた。展覧会の中だけでなく、家に帰ってからも利用してもらえるものと確信している。

ワークショップでは、すべての講座を、実物をじっくり観察し、解説を聞いて、自分で作ってみる、のかたちをとった。自分の作品としてかたちに残せ、それを持ち帰ることが特に好評を得た。学校教員が企画立案、運営に関わっていることが参加者には親近感と安心感があるようで、うち解けたムードで実施できたことも大きな成果であった。

～回収したアンケート結果より～

ワークシートについて

- ・教科書との関連性をおいながら興味深く鑑賞させていただきました。子どもも喜んで、帰りに是非図録をとせがまれてしまいました。今後も子ども用ガイドブックの作成配布を是非お願いしたいです。(中学生の保護者)
- ・薄い冊子なのに内容が充実していると思いました。(小学校5年生の保護者)
- ・小学校高学年には少し易しかったようです。(小学校5, 6年生の保護者)
- ・鑑賞のポイントなどアドバイスがあって良かったです。(小学校6年生の保護者)
- ・子ども用のガイドブックがあれば、家に帰ってからもそれを見ながら話がはずんだりすると思うので、とてもいいと思います。(小学校6年生の保護者)
- ・やはりクイズものは喜ぶ。絵の中でもクイズを取り入れてほしい。(小学校1年生の保護者)
- ・余白が十分あり、子どもがとっかかりやすいガイドブックです。クイズ形式では興味を引かれたようで、展示品を見る目が輝きました。鑑賞に役立ちました。帰宅後もまた開いて思い返すのに使われることでしょう。(小学校2, 4, 6年生の保護者)
- ・小学生と中学生が同じものを利用するのは難しいと思う。(中学生の保護者)
- ・学校では、習えないことも取り入れてもらった方がレポート作成時などに役立つので

はないでしょうか。(中学生の保護者)

- ・もう少し絵の解説を増やしてほしい。(小学校1, 2年生の保護者)

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

●博物館のイメージアップ

「神戸市立博物館は面白い。」ワークショップの参加者やワークシートを手に取った入館者の中では、このイメージができつつあるのではと考えている。

「神戸市立博物館では、いいワークシートがもらえる。」「神戸市立博物館のワークショップは面白い。」こんな願いが叶えられてきているという手応えを感じる。それは、何度もワークショップに応募してくれる子どもの数の増加や保護者からの問い合わせの数にも表れてきている。

●学校との連携強まる

プロジェクトチームの結成でさらに学校との連携が強まった。昨年からの積み重ねもあり、博物館、教員それぞれが求めているものを理解し合い、成果に表現できるようになりつつある。率直な意見交換ができる関係、お互いの意図を理解できる関係が築かれてきた。何より教員が博物館に出入りする機会がこの2年間で飛躍的に増えたことに連携の強化が表れていると思う。

●博物館職員の意欲強まる

芸術拠点形成事業の取り組みに大きな成果が得られたことで、さらに他の普及事業への工夫や内容改革が進んだ。よりわかりやすく、面白い事業への意欲が強まっている。

(6) 今後の課題

■一過性のものとして終わらせない

多額の予算をつけていただいたことをきっかけに始めた取り組み。これを発展的に継続させることが第1の課題であろう。さらなる知恵をしぼる必要を強く感じる。

■博物館同士の連携

1つの博物館だけで取り組むには限界がある。横のつながりをさらに広げ、博物館同士で協力する必要があると感じる。

■市民の方との連携

身近な市民の方の知恵をかりる必要性を強く感じる。博物館にはない知恵をきっとかしてもらえる。